

四川大地震と生活復興 —北川新市街被災者へのインタビュー調査から—

奈良由美子（放送大学）・任輝（福岡大学大学院）・劉維雪（福岡大学大学院）・藤本浩明（福岡大学）

1. 研究目的

四川大地震の発生から4年が経過した。中国当局は2012年2月に「震災勝利宣言」を出し、震災からの復興が成程に完遂されたとしている。そのなかで、震災によって生活システムが崩壊した生活者の復興は「勝利」に到達したのだろうか。本報告は、四川大地震によって集団移転を行った被災者を対象に、第1に生活復興の過程と現状はどのようなものであるか、第2にその過程に影響を及ぼした要素は何であるかを検討することを目的としている。

四川大地震に対しては自然科学・社会科学からさまざまなアプローチが行われている。被災者研究としては、高齢者や子どものストレスの実態や影響要因を分析したり（黄河清ら，2009；陈高尚，2010 など）、仮設住宅に暮らす高齢被災者の心理的健康状態を明らかにしようとする（王婷ら，2010）など、いわゆる災害弱者に焦点をすえたものが多く見られる。また、赵延东ら（2010）によって26被災県（市、区）の住民を対象に行われたアンケート調査は、震災1年後の被災者の生活回復の状況実態を把握する貴重な量的研究である。本研究は、震災4年後における被災者について質的研究を試みるものである。すなわち、集団移転を余儀なくされるほどの深刻な被害を受けながらも、家族内で生活再建の主な担い手としての役割を担う被災者が、一般の震災をどのようにとらえ、そこからどのように生活を立て直そうとしているのかを把握してみたい。

2. 研究方法

四川省北川県を対象被災地とし、以下の3課題によって研究を行った。(a)被災地の物理的状況の観察、(b)社会の側の被災地(者)支援についての二次データにもとづく考察、(c)被災者インタビュー調査による一次データの収集と分析・考察。本報告ではおもに、このうち(c)について発表する。調査概要等は以下のとおりである。

(1) 調査フレーム

- ① 調査期間・・・2012年2月28日～同年3月5日
- ② 調査対象者・・・北川新市街の災害復興住宅に住む被災者。(要件：四川大地震により甚大な人的・物的被害を受けている、30歳代～50歳代、当該世帯における生活の中心的担い手。)
- ③ サンプリング・・・サンプリング台帳は、今回訪問した復興住宅の2011年時点の住民登録データである。この復興住宅は新しく建設されたものであり、また地域的にも流動性の高い地域のため、全戸100%の世帯情報が網羅されているわけではないが、2011年の人口統計と住民登録による情報から少なくとも80%以上は網羅されている。実際のサンプリングは、このリストをもとに電話、訪問等で対象者条件に合うかた10名を選ぶかたちで行った。
- ④ 調査場所および時間・・・それぞれの自宅にて、1時間～2時間程度。
- ⑤ 調査方法・・・面接法による半構造化インタビュー。(中国人のインタビュアーを介して行った。被調査者の許可を得たうえで、インタビューの様子は録画・録音。中国語版および日本語翻訳版の逐語録を作成。)
- ⑥ 調査項目・・・毎日の暮らし(すまい、仕事、収入、健康状態、ひととのつきあいなど)にどのような変化があったか、自分自身にどのような変化があったか、災害についてどう思うか、今の生活についてどう思うか、将来の生活についてどう思うか
- ⑦ 研究メンバーおよび調査協力機関・・・奈良由美子、任輝、劉維雪、藤本浩明。調査協力機関として中国社会科学院。

(2) 調査対象者の概要

①調査地の概要

北川県の四川大地震による死者・行方不明者は2万人。羌族自治県の政府機能が集中している曲山鎮は完全に崩壊、再建は困難。街ごと南に20kmの新しい場所に移し再建(廃墟となった曲山鎮中心街はそのまま残り「地震記念館」に)。新北川市街は、住宅団地、文京地区、工業団地、医療・福祉ゾーンからなる。35,000人が集団移住。

70,000人規模の都市に。総面積2867.83km²。

②調査対象者の基本的属性(次表のとおり)

性別	年齢	同居世帯構成	被害の程度 (物的)	被害の程度 (人的)	職業(現在)	職業(以前)	現在の住宅 (タイプ、面積)	住宅地名	世帯月収	個人月収	民族
男	41	本人、妻(再婚)、娘(地震後出生)	住居他全て	両親、妻、子ども死亡	自営業	水処理場作業員	アパート(120平米)	爾瑪小区	1000元	1000元	漢族
女	51	本人、夫の母親、息子	住居他全て	夫、夫の父親死亡	街区清掃員	農業	アパート(107平米)	爾瑪小区	1900元	1600元	チヤン族
女	34	本人、息子	住居他全て	両親死亡、 子どもの右腕切断	アパレル店 販売員	バーテンダー	アパート(107平米)	爾瑪小区	1200元	1200元	チヤン族
男	42	本人、妻(再婚)、娘2人(現妻の子ども、自分の子ども)	住居他全て	妻、姉、義兄死亡	水処理場整備	水処理場作業員	公営住宅(90平米)	馬龍小区	1000元	1000元	漢族
女	43	本人、娘	住居他全て	夫、息子死亡	都市管理局 雑用係	アルバイト	アパート(106平米)	爾瑪小区	1050元	1050元	漢族
男	53	本人、妻(再婚)、娘(現妻の子ども)	住居他全て	妻死亡	自営業 (喫茶店のレストラ ン)	農業	アパート(80平米)	爾瑪小区	900元	900元	漢族
男	39	本人、妻(再婚)、娘2人(現妻の子ども、地震後出生の子ども)	住居他全て	妻、娘死亡	街区組長	野菜販売	アパート(106.18平米)	馬龍小区	1000元	1000元	漢族
女	58	本人、夫(再婚)	住居他全て	夫、両親死亡	不動産管理 会社清掃員	主婦	アパート(140平米)	爾瑪小区	1500元	900元	漢族
男	30	本人、妻、娘(地震後出生)	住居他全て	母親、息子死亡	自営業(建築)	自営業(建築)	アパート(100.13平米)	馬龍小区	4000元	4000元	漢族
女	31	本人、両親、娘(地震後出生)、夫とは離婚	住居他全て	娘、妹死亡	タクシー運転 手(個人)	駅切符販売員	アパート(107平米)	爾瑪小区	3000元	1200元	チヤン族

3. 結果および考察

(1) テクストの概観

- ①どの世帯も100㎡程度の広い家に住み、買い物や通院・通学などの利便性も以前より改善したとしている。
- ②選ばなければ仕事はあるが、ほぼ全員が「以前の仕事のほうが良かった」と答えている。これは、以前の収入が良かっただけでなく、やりがいがあった、慣れ親しんだ仕事(農業など)であったとの理由によるもの。
- ③収入については総じて「不満足」。それでも、給与に加えて、被災者世帯には震災から4年近くが経過した時点でも生活補助金が支給されるなど、なんとか暮らしていける状態にはある。ほとんどの回答者にとって、災害復興住宅のローン返済が大きな生活関心となっていた。
- ④健康状態には個人差。心身の健康状態の良いひとほど生活再建状況が良い傾向にある。
- ⑤人間関係にも個人差。以前からの人間関係の絆をより強めたうえに現住所の近隣との関係を展開して助け合っている被災者がいる一方、友人や親族との関係も絶ってしまった被災者もいる(地理的・経済的理由)。人間関係を維持・展開しながら多くのソーシャルサポートを得ている被災者ほど、生活再建状況は良好という傾向が見られる。
- ⑥将来の災害については「もう起こらないと思う」とする被災者が半数程度。将来の災害への備えを積極的にとらえている被災者の現時点での生活再建の程度は良好であるという傾向が観察された。
- ⑦「四川大地震によって多くを失ったが、その分自分自身が強くなった。また、家族や友人との絆も深まった。震災には意味があった」との語り。そうする被災者は、より良い職や収入を得るべく具体的な行動をとっているし、将来への見通しや生活設計も「明るい」「良くなるだろう」とする。いっぽう、「地震はわたしからすべてを奪った」「もういつ死んでもかまわない」「ただただ以前の生活に戻りたい」とする被災者は、生活再建の程度は低い。
- ⑧すべての被災者に共通して見られるのが、旧北川県への郷愁の表出。郷愁を語るとき、ほとんどの被災者が「青い空」「きれいな空気」「美しい山」といった、自然の豊かさを表現する単語を用いていた。故郷への愛着やなつかしい思いは、震災から4年経ってなお大きい。
- ⑨震災対応について、中央政府に対する評価はおしなべて高い。いっぽう、地方政府に対しては「(移転に際して)被災者からは土地を安く買いたたき、それを高く売って、自分たちの儲けにしている」など、不信と不満を示す被災者が少なからずいる。
- ⑩「一番大切なものは家族」、「子に教育を受けさせ成人させるのが自分の責任、つとめ、生きる支え」、「夫が死んで、同居の義母の面倒を見られるのは自分だけ。頑張るしかない」との語りが多く聞かれた。「一番大切なことはお金を稼いで良い生活を送ること」との意見も。

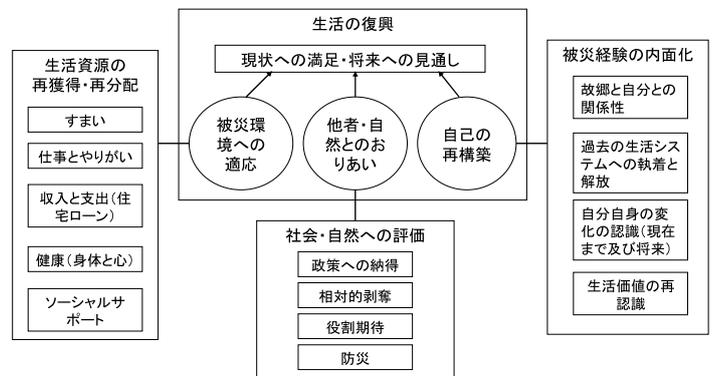


図1. インタビューデータによる暫定モデル

(2) テクストの概観による暫定モデル (図1)

4. まとめおよび今後の課題